

## 「LEGEND Travel Award」学会レポート

筑波大学医学医療系臨床検査医学/スポーツ医学研究室

研究員 青木海

参加学会：第 76 回日本栄養・食糧学会大会

この度は、BioLegend/Tomy Digital Biology 「LEGEND Travel Award」にお選びいただき誠にありがとうございます。2020 年にお選び頂きましたが、その後コロナ禍の影響を受け、今年度ようやくオンラインでの学会に参加することができました。私は、2022 年 6 月 10 日から 12 日まで、兵庫県神戸市で開催された第 76 回日本栄養・食糧学会大会に参加して参りました。今回は私が拝聴した演題等から印象的だったものに関してレポート致します。

同志社女子大学鈴木拓史先生のグループは栄養素が小腸の絨毛形態や遺伝子発現に及ぼす影響に注目している。今回の演題ではカプサイシン処理により消化管迷走神経を介した求心性神経経路（求心路）を遮断した際の小腸絨毛に対する影響について解析されていた。求心路を遮断した場合でも小腸上皮細胞に対する栄養素の刺激を起因とする絨毛や遺伝子発現の表現系があり、小腸上皮細胞の内在性ホルモンによる恒常性維持機構があると明らかにされていた。

新潟県立大学松澤由季先生のグループでは腸管オルガノイドを用いた炎症性腸疾患（IBD）治療のための基礎研究を行われていた。これまでのオルガノイドを用いた研究では、IBD を模倣した慢性的な TNF- $\alpha$  刺激を検討したものはあるが、短時間刺激による検討はほとんど行われていないということであった。炎症の初期状態の理解を深めること、モデルを作成することは、炎症の予防や、緩和に働く機能性成分スクリーニングにも有用である。松澤先生のグループでは腸管幹細胞マーカーである Lgr5 を EGFP で標識したマウス由来の腸管オルガノイドを作成していた。また、短時間の TNF- $\alpha$  刺激であっても幹細胞数を減少させ、バリア機能を低下させるということを明らかにされていた。

自分自身も今回一般演題で発表しました。現在のテーマは日本でも当グループでしか行っていないもののため、普段の研究結果の方向性について多くの先生方とディスカッションすることができ大変有意義な時間となりました。オンライン開催の学会は現地に行かずとも参加できるという良さがありますが、対面でディスカッションを行うことのできるオンライン学会が開催できる情勢になり本当に良かったと感じます。

最後になりますが、この度は学会参加にあたりご支援いただきましたことを、心より感謝申し上げます。